

弟子たちの精神的なまえ 女将には顔がよがりません

弟子たちを育てるのは、私だけではなく、女将の力があってこそだと思っています。私は立場上、親方として相撲の技や力士の心得を伝えるために、弟子たちには厳しく接することが多いのです。一方で女将は、私には言えないような悩みや弱音をしっかりと受け止めて聞いてくれます。また私が直接注意するよりも女将の方が効果的だと思えるときには、代弁して伝えてもらっています。

部屋の運営としては、地域に根付いた部屋にしていきたいと思っています。そのため、地域の行事やお祭りにも参加したいのですが、地方巡業や場所があるとなかなか参加する時間を持つことが難しいのです。そんなときも女将にお願いしています。

思い返せば、現役で相撲を取っていたとき、怪我で苦しんでいるとき、引退し、浅香山親方を襲名するとき……。いつ何時も女将は、私を支えてくれ、いっしょに歩んできてくれました。女将には、本当に感謝しています。

巴海さんの女将さんとは大変懇意にしていたと思います。女将同士のお付き合いだけでなく、お店にもよく弟子たちを連れて行き、美味しいお料理をいただいています。そんなときに必ず「巴海さんのちゃんこの味をウチのちゃんこでも再現できたらなあ」と思っているのですが、やっぱり料理人の方が作る味とは全然違いますね。また美味しいちゃんこをいただきに行かせてもらいます。



ちゃんこ巴海新聞

平成 28年3月1日(火)
発行 ちゃんこ巴海
東京都墨田区両国 2-17-6
TEL 03-3632-5600

第17号



弟子紹介

現在、6名の弟子を抱えています。まだまだ若い力士揃いですが、元気とやる気に満ちあふれた弟子たちです。

- ① 魁渡 頌胆(かいとしゅうた)
- ② 平成8年6月19日
- ③ 新潟県佐渡市
- ④ 浅香山部屋第1号の関取になれるように頑張ります。

- ① 魁盛王 目祈(かいせおうあさき)
- ② 平成7年1月28日
- ③ 愛知県西尾市
- ④ 関取目指して頑張ります。

- ① 山崎(やまさき)
- ② 平成10年7月2日
- ③ 愛知県清須市
- ④ 横綱を目指します。

- ① しご名 ② 生年月日
- ③ 出身地 ④ 抱負



- ① 小原(おぼら)
- ② 平成11年7月6日
- ③ 神奈川県座間市
- ④ 番付をどんどんあげることです。

取材後記

浅香山親方、貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

部屋を開かれて一年、相撲や弟子たちに懸ける思いを伺い、人を育てることの難しさと楽しさに共感しました。また初場所序二段優勝した魁渡くんのお祝いをさせていただきました。これから羽ばたく若い衆が真剣に稽古に励む姿を見て、心打たれました。来場所もガンバってください！ 巴海一同、応援しております。

女将 工藤みよ子
鏡 力三

部屋開きから一年

浅香山博久親方を訪ねて

ちゃんこ巴海の創業者・巴海(元・小結)は、数多くの有名力士を輩出している歴史と伝統ある9代目友綱(親方)として数多くの弟子たちを育てました。その一人である魁輝(元・関脇)が11代目友綱隆登親方を引き継ぎ、活躍されています。

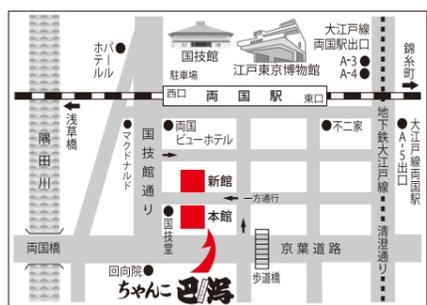
友綱隆登親方の愛弟子の一人であり、惜しまれながらも平成23年7月20日、現役生活に幕を下ろしたのは、魁皇関(現・浅香山親方)でした。引退の際には「悔いは一切ありません。相撲界に入っただけに良かったと思います」と清々しい表情で土俵生活を振り返っていた姿が印象的でした。

浅香山親方が角界の扉を叩いたのは、15歳のときのこと。九州巡業に来ていた友綱親方に誘われて弟子に入りました。昭和63年の春場所初土俵を踏み、ひたすら相撲に向き合い続けた23年間。その成績は輝かしく、史上最高の通算勝利記録1047勝、幕内優勝は5回、幕内在位107場所、大関在位65場所という数々の記録を打ち立てられたのでした。巴海では、平成24年5月27日に開催された引退相撲、その後の断髪式に葉、私工藤の他に、専務の佐久間と、常務の谷口が参加させていただき、その感動を大いに分かち合うこととなりました。

引退後、15代目浅香山(親方)を襲名され、親方人生をスタートされました。親方業の仕事は、日本相撲協会の仕事もありますが、最も大きく占めるのは、部屋に所属する弟子たちの育成です。技術面、精神面、相撲の伝統など、まさに「親」のように指導していかねればなりません。

2015年2月1日に、墨田区緑に部屋開きを果たされた浅香山親方。現在は、女将と二人三脚で、6名の若い力士を育てています。

巴海 女将 工藤みよ子



ちゃんこ巴海
ご予約 03-3632-5600
お問合せ FAX 03-3635-3056
〒130-0026 東京都墨田区両国 2-17-6
全300席 本館130席 新館170席
営業時間
平日 11時半～14時 17時～22時
土・日・祝日 11時半～14時 16時半～22時
※6月～8月は月曜定休

両国の見どころ
相撲博物館 福と大相撲
～相撲博物館でお花見～
平成28年(2016)2月23日(火)～4月15日(金)

心も体も強い力士をぞびてほしいです。

部屋開きから一年余り もうやく部屋らしくなってきました

部屋開きのお披露目をしたのが、2015年2月1日のことでした。同日に土俵祭りを執り行い、同門の伊勢ヶ浜部屋、友綱部屋の関取衆と連合稽古をした門出のあの一日は、昨日のように思い出されます。

この一年は、本当にあっという間に過ぎて行きました。最初の頃は、どんな雰囲気か部屋にしていくのか手探り状態でした。真新しかった稽古場もだんだんと馴染んできて、傷が付き、稽古の跡が目立つようになりました。弟子たちが暮らす大部屋も生活感が出てきました。いまでは、私も弟子たちもここでの暮らしに慣れ、良い緊張感とリラックスした気持ちを持って稽古に励んでいます。ようやく部屋らしくなってきました感じているところです。

1988(昭和63)年に初土俵を踏んでから23年間の相撲人生。5度の幕内優勝、あと一歩だった綱取り(横綱昇進)、通算勝利記録1047勝の達成、大怪我に泣いたこともありましたが、2011年の名古屋場所所引退を決意するまでの20年余りは、紆余曲折ありましたが、相撲のことは大体分かったつもりでいたのですが、親方になって初めて気づいたことがたくさんありました。もちろん現役のときに親方の仕事をもっと勉強しておけば良かったのかもしれませんが、当時は相撲を取ることが私にとつてのすべてだったので、それ以外のことなんて考えられなかったですね。現役時代と、親方になってから見える相撲の世界の違いを知り、相撲道の奥深さを体感しています。

お客様の期待に答え続けることが プロの力なのです

力士として相撲を取る以上、来てくださるお客様に対して万全の状態を保って本場所に挑まなければなりません。言い換えれば、プロ意識を持って、稽古にも本場所にも当たり続けなければならないのです。

数々の戦いを乗り越えてきた中で、お客様からたくさんのお声が上がった一番は、いまでも忘れられないものです。やはり、ダラダラとした相撲では、お客様から飽きられてしまうんですね。私たちはプロとして、お客様の期待に応えられるような相撲を取り続けなければなりません。

その基盤となるものが稽古なのですが、日々の稽古を見ていると、気持ち切り替えようになっている弟子の姿が目に入ってきます。そんなときにはなぜやっているのか、その意味を伝えています。

相撲の基本は前に出ることです。ダイナミックな投げ技は格好も良いし目を引きますが、やはり相手を土俵の外に出すために前に押し出していく力が一番大事です。それには、足腰を強く鍛えなければなりません。私の場合は、握力計が壊れるほどの力で「怪力」と呼ばれていましたが、握力と前に押し出す馬力とを活かして相撲を取るのには難しかったですね。ですが、「普通の人ができないことをやる」からこそ、プロと呼べるのだと思います。弟子たちにも、一人ひとり得意な技や強みがあるので、それを活かして自分の相撲を取ってほしいですね。



遊びに来てくれるのはなご。 癒しの環境が力士を育てるのです。

弟子たちに口酸っぱく言っているのは「遊びにきていってほしいのだ。力士としての自覚を持って」ということ。私は友綱親方に誘われて、15歳のときに故郷の福岡を離れ、相撲道を歩み始めました。正直なところ生半可な気持ちで相撲部屋に入門したので、稽古はびつくりするほど厳しいと感じました。ましてや朝起きて普通は服を着るところを、裸に廻しただけ着けるなんて、始めの頃は恥ずかしくてたまらなかったのです。でも親方や先輩たち、そして同期で角界に入った力士たちと切磋琢磨するうちに、私の心は少しずつ変化していきました。振り返ると、そんな厳しい環境が私を強く育ててくれたのだと思います。

弟子たちには、まずは相撲に取り組む力士の在り方や姿勢を学んで欲しいと思っています。稽古は地味で、厳しいものです。遊んだり、手を抜いたりしたくなる気持ちも分からなくはないです。しかし遊びばかり覚えてしまつては、自らの将来を閉ざしてしまうことになるのです。

例えば、稽古中に「ゼエゼエ、ハアハア」と声を荒げることがあります。毎日胸を貸し、稽古をつけている者からすると、本当にキツくて限界に近いのか、それとも早く稽古を切り上げてもらいたいがためにしんどそうに振舞っているのかは、一目瞭然で分かるのです。相撲は、一気に強くなることはありません。基礎をしっかりと叩き込んで、毎日の稽古の一番一番の積み重ねが、本場所の成果につながるのです。

お客様から応援してもらえ 力士、部屋に育っていきなす

親方になってからの一番の心配事は、弟子たちが外でしっかりと挨拶や受け答えができていくかどうかです。せつかく声をかけて下さったお客様に対して不躰な態度を取るのには、当事者の恥だけでなく、部屋全体の恥になるのです。毎日うるさいくらいに挨拶や礼儀については言っているつもりですが、自律した心を持つて、プロの力士として恥ずかしくない態度でいてほしいですね。

力士である以上、弟子たちにはもちろん番付を上げてほしいのですが、力の強さだけでなく、心も強く鍛えてほしいと思います。勝つ喜びが稽古の励みとなり、敗けた悔しさが根性と忍耐を養います。稽古も角界で生き残るのも厳しい世界、そんな中で頑張れば頑張った分だけ強くなれる。その努力はお客様の応援となり、自分の糧になっていく。これが私の相撲人生で学んだことであり、相撲の素晴らしさだと思っています。

だから私は、お客様から応援してもらえ力士、部屋に育てていきたいと思っています。こんなに一所懸命稽古をしているのか、こんなに真剣に相撲に向き合っているのかという情熱は、見ている人の心を動かすと思います。強くなるのがすべてだと考えるのではなく、一所懸命に相撲に取り組むという姿勢を養い、人間として成長してほしいと思います。

どうぞ、皆様、応援のほど、よろしくお願いいたします。